

トーマス・マンの小説「魔の山」の主人公ハンス・カストルプは、スイスのアルプス山脈にある療養所に、ただ数週間のつもりが、最終的には7年間滞在することになりました。私は最近、この小説について度々考えずにはいられませんでした。なぜなら、ハンス・カストルプのように、私も素晴らしい場所へ7年間滞在することになり、それは予想していなかっただけでなく、また、こんなに早く時が経つとは思っていなかったからです。

初めは奈良へ行くことが不安でした。東京の中央大学に3年間いた後、求職中だった私は、DAAD(ドイツ学術交流会)から奈良女子大学を紹介されました。その頃は、奈良女子大学について全く知らなかったのを、ほとんど断るところだったのを、2人の同僚が、是非とも行くべきだと勧めてくれました。それは後に正しかったと気付くことになりました。とても優秀な大学であるだけでなく、とても勤勉で才能のある学生達、親切な同僚、あたたかい環境で、私は毎日喜んで新しい職場へ通いました。

そしてまた、抜群の仕事条件だけではなく、社会的な環境としても、奈良はとても居心地が良いと思いました。例えば、女子大の学生もよくアルバイトしていた沢山の小さなレストランやドイツパンの店、奈良町にある数々の店、そしてもちろん奈良の人々は、私が時々方言が分からなくても、いつも親切に接して下さいました。

奈良日独協会では、特に親切な良い方々に出会いました。協会の様々なイベントや企画に携わることが出来たのは、私にとっていつも喜びでした。特に、大安寺での夏のビアアーベントやコンサート、ドイツからの訪問者が思い出深いです。

しかも、バイエルン独日協会からの訪問者の中には、昔同じ大学で勉強した仲間がいて、何と18年ぶりの再会を果たしました。また、ドイツ料理講座やクリスマス会も良い思い出です。

今年の4月から横浜へ引っ越し、神奈川大学に勤めています。奈良を離れるのは辛いことでした。女子大の学生達は皆とても悲しんで、そして私自身も、二度とこのような良い学生達を持つことはないだろうということが分かっていました。それならば、なぜ奈良を離れることにしたのか？という、単純ないくつかの理由があったからです。

神奈川大学では准教授になり、妻は横浜出身、私自身も関東で勉強し、就職し、結婚もしたので、関東は私の日本の故郷ともいえる場所です。2番目の故郷は、もちろん奈良です。私が引越した後、遷都1300年祭が始まり、どんな様子なのか、今から既に再び奈良を訪れる日を楽しみにしています。

奈良日独協会の皆様、ドイツに強い関心を持ち続け、更にドイツとの交流を深めて下されば嬉しく思います。そして皆様に再会する機会があれば、特に嬉しく思います。

私と私の家族は、皆様と過ごした7年間の素晴らしい時間に、心から感謝いたします。

ステファン・ブッヘンベルゲル

(翻訳：上野弥生さん、Neues in Nara Nr.31 添付)